

【12-99】

## フローティングプラットフォーム

## Floting Platform

○櫻井佑\*1, 岩佐明彦\*2, 長谷川崇\*3, 赤熊宏紀\*4, 巨亮\*1, 田中悠介\*5, 中川朋子\*6, 鎌倉敏士\*1,  
竹内敦志\*1, 宮越敦史\*1, 安達美里\*1, 石岡鉦太郎\*1, 加賀谷直洋\*1, 北見健一郎\*1, 竹村泰彦\*1

○SAKURAI Yuu, IWASA Akihiko, HASEGAWA Takashi, AKAGUMA Hiroki, JU Liang, TANAKA Yusuke, NAKAGAWA Tomoko, KAMAKURA Satoshi  
TAKEUCHI Atsushi, MIYAKOSHI Astushi, ADACHI Misato, ISHIOKA Koutarou, KAGATANI Naohiro, KITAMI Kenichirou, TAKEMURA Yasuhiko

本作品は作業台船を用いた信濃川上の水上広場である。川岸から少しでも離れた場所からの景色はとても迫力のあるものである。台船上からの眺めを通して、信濃川とまち、市民が関わり合うような接点となる場所を目指した。並行して水際での行える行為の可能性を探るため、様々なイベントを行った。セルフビルドで設営を行い、企業や行政から借りた資材を利用することで、ローコストと省資源を目指した。

Keyword open space on the water public space view riverside construction ship  
水上広場 公共空間 景色 水辺 台船

■背景と目的 信濃川は新潟市の2つの中心街の間を流れている (fig.1)。しかし、アクセスの不便さなどからまちとの関わり合いが少ないのが現状である。近年、一部の川沿いに親水型の堤防がつけられ (fig.2)、人が集まるきっかけはできたものの、水際の特徴を十分に生かしているとは言いがたい。本作品は、2006年8月に10日間限定で行った社会実験としての信濃川の水上演習である (fig.3)。この広場を通して、(1) 市民の興味や意識を水際に向かわせ、川との接点をつくること、(2) 景色を眺める場所をつくること、(3) 水際で行える行為の可能性を探ることを目的とした。

■空間構成 利用者がくつろぎながら景色を眺められる「視点場」をつくることと、橋上や対岸からの「視線の獲得」が求められた (fig.4)。

(1) 視点場 萬代橋側と柳都大橋側に視点場をつくった。どこからでも好きな景色が見れるように方向性のない曲線の円弧で外周を構成した。そして、広範囲にわ

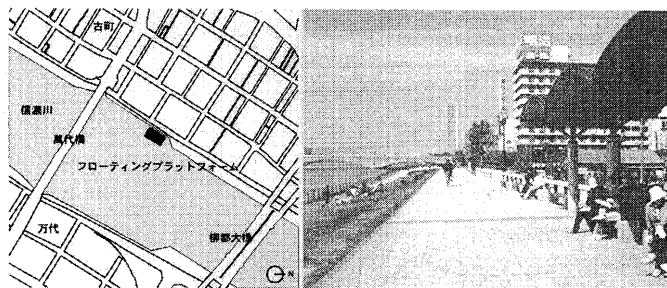


fig.1 敷地



fig.2 やすらぎ堤

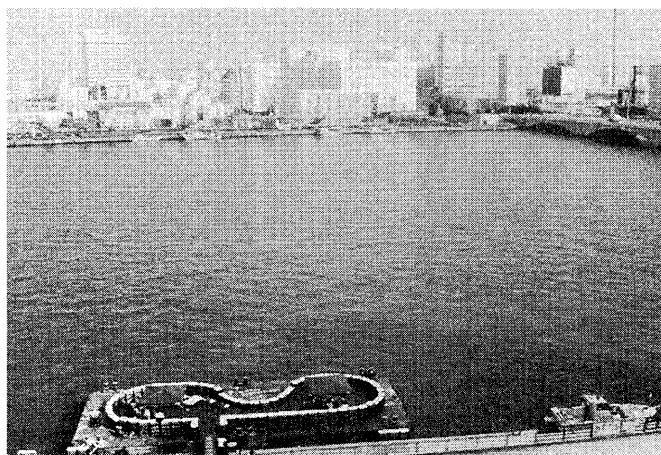


fig.3 フローティングプラットフォーム俯瞰

\*1 新潟大学自然科学研究科 博士前期課程  
\*2 新潟大学工学部建設学科 准教授・博士 (工学)  
\*3 新潟大学自然科学研究科 博士後期課程  
\*4 フリーランス 修士 (工学)  
\*5 前田建設 (株) 修士 (工学)  
\*6 加賀田組 (株) 修士 (工学)

Graduate Students, Graduate School of Science and Technology, Niigata Univ.  
Assoc. prof. of Dept. of Architecture, Faculty of engineering, Niigata Univ., Dr. Eng  
Graduate Students, Graduate School of Science and Technology, Niigata Univ., M. Eng  
Free lance., M. Eng  
Maeda corporation., M. Eng  
Kagata corporation., M. Eng

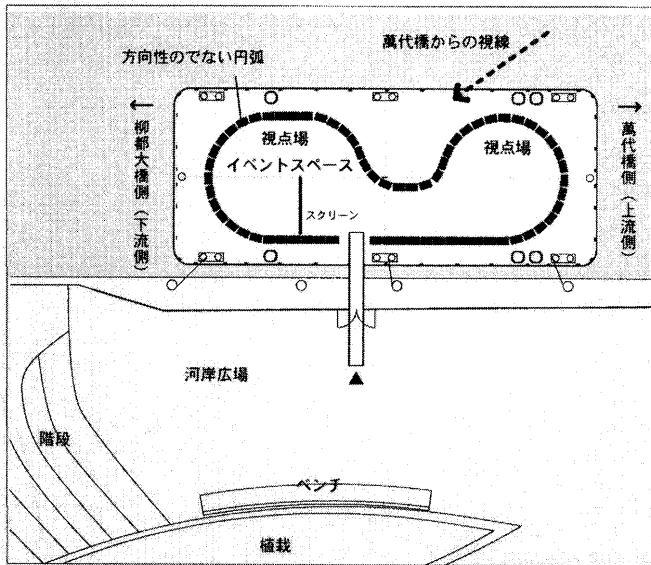


fig.4 配置図 1/600

たって視界を確保できるように柵を低く設定した。柵は低くても、人が乗り越えないように幅をとることで安全性を確保した。また、テントやベンチを設置し、柵のコンテナをテーブルとして使用し、利用者がくつろぎながら景色を楽しめる仕掛けをつくった。

(2) 視線の獲得 周辺からでも広場上の様子が窺いやすくなるように柵を低くした。特に萬代橋からの見え方を意識し、柳都大橋側に大きなイベントスペースを設置した。萬代橋からでもスクリーンに視線が届くように、広場中央にくびれをつくった。

■制作における工夫 設営はセルフビルドで行った。企業や行政から借りた資材を利用することでローコストと省資源を目指した (fig.5)。

### 作業台船

信濃川の花火大会後、打ち上げ台船を移動し、利用した。広い場所が確保でき、高さもあるため、普段よりも高い場所からの景色を楽しむことができる。

### 農業用コンテナ

置き積み上げることで柵になるため、曲線の外形にも容易に対応できる。コンテナ内部には、重石として信濃川の水、夜間照明の提灯コードを仕込んだ。

### ウッドチップ

伐採樹のウッドチップを広場の足下に撒き、作業台船の鉄板部分を覆った。クッション材、鉄板の錆び隠し、日差しの照り返しの防止をはかった。

■水上でのイベント 景色を眺めることに加え、同時に、飲食スペースやレクチャーなどを行い、水上の広場で行える行為の可能性を探った (fig.6)。また、昼間に船で水辺調査を行い、夜間スクリーンに上映し、水

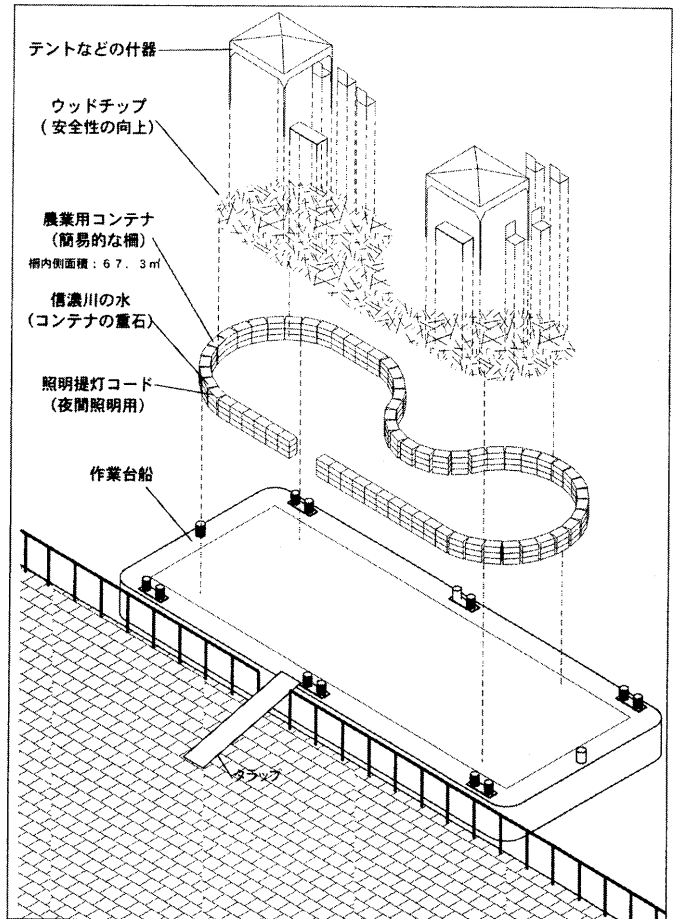


fig.5 アクソメトリック



fig.6 スクリーンを使つてのレクチャーと行ったイベント



fig.7 フローティングプラットフォーム上の様子と基本データ

辺環境についての議論の場を設けた。

■まとめ 本作品は新聞やテレビで報道され、多くの市民に認知されたプロジェクトとなった。「見る」ことを意識する場所をつくることで、利用者と水辺との接点となる機会をつくることのできた。今後も水辺での可能性を探っていく、市民と水辺の接点をつくっていきたい。